# 転生者なんだが原作がおかしくなった

岸寄空路

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こんなはずでは……！ｂｙオリ主

# 目次

設定集 ―― 1
一誠の兄弟に転生したら大変なことになった ―― 5
グレモリー家次男になったら原作崩壊した ―― 8
曹操に転生したら英雄派が別物になった ―― 14
ヴァーリの姉らしいけど原作知らない ―― 20

# 設定集

・兵藤礼人

一誠の双子の兄になった転生者その一。死後、神様に会ってランダムで特典を決めたら赤龍帝になった。その所為で原作に関わる事になると思われる。少なくとも堕天使に目を付けられるのは確定。見た目は黒鉄一輝に似ているので割とモテる。しかし、原作に巻き込まれる事を考えて断っている。その所為で「女の趣味が特殊なのでは？」「あるいはホ○かも」と疑いをもたれ始めているとかいないとか。一誠が赤龍帝ではないため、自分が悪魔になるのではと考えて必要最低限の範囲で鍛えていた。これは鍛えすぎると『悪魔の駒』で転生できなくなるかもしれないと考えていたため。

一誠とは兄弟として仲は良い。だが高校に上がるまで自分の事を優先しがちで、尚且つ中学の間はまだ「思春期だから」と思って深刻に考えていなかった（更に原作よりもおとなしかった）ので変態度が原作のままである事に気づかなかった。一誠がおとなしかったと言うよりは、駒王学園で男女比が変わったために暴走し始め、変態行為が過激になっていった模様。暴走している一誠達三人組をなんとか止めようと頑張ってはいたが神器を持っていない一誠はあっさり駒王学園から転校した（これでも温情、本来なら退学でもおかしくない）。

主人公の立場を奪った事を苦悩する彼の未来は割と平和な模様。主に他の転生者のおかげで。

前世での愛読書は『ＤＲＡＧＯＮ　ＱＵＥＳＴ　―ダイの大冒険―』。

・ジョシュア・グレモリー

サーゼクスの弟でリアスの兄になった転生者その二。自分が事故死した記憶は有る（そのために外的要因で死ぬ事を恐れている）が神には出会っていない。特典は無いが魔力は上級に匹敵する。法整備を行った頭脳派チート。本人は良心が咎めたのと命の危機を感じて

頑張った模様。レイヴェルと婚約した勝ち組。悪魔としての実力は上位にあたるが本人は「そんな事より内政だ！」と公式戦はほぼ戦わなかった。兄と妹と違い『滅びの魔力』も持っていない事もあって「自信が無いから戦わない臆病者」扱いされていた。実際は原作前の駒王町ではぐれ悪魔退治を一人で行い実戦経験は積んでいる。魔法も前世の知識を利用して作っている。

使用魔法は『紅い土星（クリムゾン・サターン）』

最初は名前を決めていなかったが、その見た目と兄の異名をもじって名付けた（本人はこれで兄に媚を売ったつもり）。球体から魔力の光線を放ち、輪は触れる物を切り裂く。更に相手を囲むことで簡易的な結界も作れる。モチーフはスパロボのエグゼクスバインの武装。本人の名前もスパロボの主人公の一人から取った。

特に見た目は決めていないがイメージに近いのはスパロボＺのヒビキ・カミシロ（傷無し）。

・曹操（憑依）

気づけば曹操になっていた転生者その三。本人に死んだ記憶はない模様。神器は原作と同じ『黄昏の聖槍』。幼少期は原作曹操と同じように過ごした。明確な違いが出たのは両親が死んだ後、前世の真っ当な両親の記憶も有ったため贅沢して身を滅ぼした現世の両親に対して「これが金に目を眩ませた人間の末路か……」と冷めた目で見ていた事。これがきっかけで神器所有者の保護を行う組織が必要だと考えるようになった。

自分が「ハイスクールＤ×Ｄ」の登場人物に憑依したことに気づいたのは闘戦勝仏に三国志の曹操の子孫である事と自身の神器の名を教えてもらってから。主人公の踏み台に転生したと認識し、とりあえず原作と違う事をしようとだけ考えて行動した結果が『ＳＰＲＩＴＳ』と言う組織を作る事となった。前世では変身ヒーローが全般的に好きだった。

・黄昏の十戒聖槍（トゥルー・ロンギヌス・テンコマンドメンツ）

曹操の禁手。元ネタはＲＡＶＥのテンコマンドメンツとＦＡＩＲ

Ｙ　ＴＡＩＬの魔槍テンコマンドメンツ。主な違いは第一の槍『アイゼンメテオール』が無い事。ハイスクールＤ×Ｄの世界でただの鉄の槍は役に立たないと考えたから。他はだいたい一緒。

爆発の槍『エクスプロージョン』
音速の槍『シルファリオン』
封印の槍『ルーン・セイヴ』
双竜の槍『ブルー＝クリムソン』
真空の槍『メル・フォース』
重力の槍『グラビティ・コア』
太陽の槍『ミリオンサンズ』
羅刹の槍『サクリファー』
暗黒の槍『ダークティアーズ』

第九の槍が暗黒なのは『黄昏の聖槍』が元々聖なる力を持っているので『レイヴェルト』にする意味は無いと判断した為。名前の由来は闇とヘスティア様の名前から一部貰った。

第十の槍も作者の中では決めている。名前だけ教えるなら『クルスニク』。

・ホライゾン・ルシファー

ヴァーリの姉になった転生者その四。神様（礼人とは別）に特典を貰って転生。転生先は決められていて、命懸けの戦いに巻き込まれるかもしれないと言われたので転生前にちょうどプレイしていた『ロックマンの力』と特にこだわりが有った訳ではないが心機一転するために『転生前と違う見た目』を頼んだ。その結果、なぜか『境界線上のホライゾン』のホライゾン・アリアダストそっくりになった。なぜホライゾンかと言うと作者が『ケツ龍皇』から連想した結果こうなった。（ケツ→ケツと言えば「まロい」＋銀髪みたいな）

ちなみに彼女の方向音痴は前世の頃から治っていない。

『機人の青砲（ロックバスター）』

言わずと知れた青いロボット、その力を再現した神器。相手の能力をコピーして保存できる。イメージとしてはＥＸＥのバトルチップ。

禁手を使えばソウルユニゾンとかビーストアウトとかファイナライズとかXのアーマーとかが使える様になる（条件付き）。

※注意
これより下は書くか未定の転生者。
今後、追加されていく可能性もある。
だが、あくまで思い付きの為、話は期待しないでください。

・ヴィヴィオ・ゼーゲブレヒト
ヤコブ神拳継承者。前世の頃にFGOのマルタに憧れ、転生してから凄女を目指すズレた感性の持ち主。表向きはマルタ様、心の中で姐御と呼んでいる。転生特典は大雑把に「マルタ様に匹敵する才能と肉体を」と頼んだら何故か高町家の聖王様に。更に何故か聖母（トワイライト・ヒーリング）の微笑まで持っているために手が付けられない。「これは……！　神は言っている、マルタ様の宝具を再現しろと！」たぶん、神はそんなこと言っていない。
もしいるなら逃げてタラスク。見た目そっくりなのも逃げて。敵ごと殴られるぞ。しかも回復するから何度でも。

# 一誠の兄弟に転生したら大変なことになった

やべえ、どうしよう。
今の俺の頭にはそれ以外の言葉が浮かばなかった。何故かって？
それはな――
「こんな犯罪紛いな事ばかりして……人として恥ずかしくは無いのか！」
「女の子は大事に扱いなさいっていつも言っているでしょ！」
家の両親が激怒しているんです。もう止めて。俺の胃がやばい。
今後の事を考えるとかなりやばい。どうにかしないといけないのにその方法すら浮かばない。
「し、仕方がないよ。男なんだから」
「関係あるか！」
「やって良い事と悪い事ぐらい分かるでしょ！」
「……すいません」
いや、分かるよ。俺の言っていることに無理があることぐらい！
でも止めないとまずいんだよ！　そんな俺の気持ちが両親に届くわけもなく、既に大火災並みに怒りで炎上している。
「いや礼人の言う通りだ！　男がおっぱいを求めて何が悪い！」
そんな状況に油を投入する馬鹿に俺の胃が悲鳴を上げる。
あ、今更ですが初めまして。神様転生したオタク系男子です。現世の名前は兵藤礼人（れいと）と言います。ええ、お察しの通り兵藤一誠の双子の兄弟です。ちなみに赤龍帝です（泣）。
勘違いを防ぐために言い訳させてもらうけど、俺は一誠のポジションを奪うつもりは欠片もなかったからね!?　ただ「転生特典はあげるけどランダムで決めるね。試行錯誤しながら強くなりなさい」と神様が厳しいような優しいような対応した結果がこれだよ！　ランダムで決めたら一誠の双子の兄弟になって赤龍帝の籠手も手に入れておまけに一誠よりも魔力が有るよ！　やったね！　みたいな状態になってもう運が良いのか悪いのかわかんねえよ！
まあ、こうなったら仕方がない。一誠の代わりに主人公やるしかな

いと幼い頃から俺は努力をし続けた。
例えばイリナと遊ばずに親に頼んでスイミングスクールで泳ぐことで筋力アップしたり。
例えばレーティングゲームの為にチェスや将棋とか戦略系のゲームで知力を伸ばしたり。
例えば道場に行って武術を学んだり、毎日走り込みして体力つけたり、神話関係の勉強したり、駒王学園に入学できるように早いうちから勉強して成績上げたりしていたんだ。
その結果……双子だから仕方がないかもしれないけど一誠と俺が比較され評判の差がひどい事になった。
自分で言うのもなんだが原作の事を考えて努力した俺は文武両道な優等生として通っている。見た目も落第騎士の黒鉄一輝に似ているからイケメン扱いされる。それこそ告白されたこともあるぐらいだ。……まあ、原作のイベントに巻き込むわけにもいかないから全部断ったけど。
一方の一誠は中学の頃から部活もせずに遊んでばかり（聞いた話ではいつもの友人達と一緒に落ちてるエロ本探したりしてそうだ）。学校の成績も悪く、駒王学園に入学できたのが奇跡だと言われている。おまけに駒王学園に入学してから更衣室の覗きと言う犯罪行為を行い原作通りの変態三人組の一人となってしまった。
言っとくけど俺は止めたからな！　というか小さい頃から注意していたんだよ!?　でも俺が道場とかに行っている間に原作通りのおっぱい狂いになっていたんだよ！　その後も何とか矯正しようとしたんだだけど全然効果ありませんでした！
そして今日、遂に女子達からの苦情を無視できなくなった（今までは共学になったばかりで問題を表に出すとただでさえ数少ない男子の今後の学校生活に悪影響を及ぼすと考え有耶無耶にしていた）先生達が両親に一誠がやってきた事を暴露しました（ちなみに松田、元浜も同じく暴露されている）。両親激怒、一誠反省無しの修羅場と化したわけですよ。
俺？　むしろ同情されたよ。先生から「必死で兄弟を止める彼の評

判に関わってきます。進路の事を考えるとこれ以上は礼人くんの人生にまで影響が出ます」と言われて両親は自分の家族すら蔑ろにしている一誠に更にキレた。
なんでこうなった。俺は一誠を大事な家族として扱っていたよ!?
だからおっぱい魔人になってからも真人間に戻そうと頑張って説得してきたのに！　その度に「男なら分かるだろ！　女性のおっぱいを見たいという気持ちが！」って反論して聞く耳持たなかったけど！
気持ちは分かるけど恋人作ってその恋人に見せてもらえ！　そう言ったら「俺みたいなモテない奴の気持ちが分からねえからそんなこと言えるんだよ！」とか言うし。お前がもうちょっと自重すりゃチャンスぐらいは作れるんだよぉぉぉ!!
ああ、こうやって過去の事を考えている間にも両親と一誠の口喧嘩が酷くなる一方で胃が痛い。
なにをそこまで気にしているかって？　いやだって今の俺完全に主人公の立場を奪って排除しようとしている自称オリ主系転生者みたいな状態だろ？　このままだと一誠に復讐されるんじゃないかって心配で心配で。……実の弟に恨まれたくないから両親を何とか落ち着かせたいんだけど――
「一誠！　反省の色が見えない以上はお前を男子校に転校させる！」
「……え」
「ちなみにそこは全寮制で規則も厳しい学校だ。長期休み以外に出られると思うなよ！」
「い、いやだぁぁぁぁ――！　そんな女っ気が無いところは嫌だぁぁぁぁぁ――！」
「もう先生と話して決めたことだ。諦めろ」
……どうやらとっくに一誠の末路は決まっていたらしい。この分だと松田や元浜も同じ目にあう事だろう。
原作だと少なくとも二年生に上がるまで大丈夫だと思っていたのに……まさか入学して半年でこんなことになるなんて……。
もしかして他に転生者いてそいつが何か関わっていたりするのかな？　まさかな。

# グレモリー家次男になったら原作崩壊した

あり得ない。

ライザー・フェニックスの頭にはそれ以外の言葉が浮かばなかった。なぜここまで自分が考えていた結果と違うのか。自分が追い込まれ膝をついている理由が分からない、いや分かりたくなかった。理解してしまえば、認めてしまえば自分のプライドに傷がつく。自身の築き上げた地位が崩れ落ちる。それだけは許せないからだ。

ライザーは目を逸らしていた。今の状況は自分が作り出したという事を。レーティングゲームで勝ち星を上げ続けて自惚れ調子に乗った結果だという事を。自業自得でしかないという事を。

既に――詰んでいるという事を。

「さて、もうだいぶ参っている様だが……降参したらどうだ？　ライザー」

「お、おのれ……！」

グレモリー三兄妹の一人、母親譲りの亜麻色の髪が特徴の次男ジョシュア・グレモリー。彼こそがライザーを追い詰めた張本人。ライザーが見下し侮っていた相手。その相手に敗北しようとしている。

「俺は！　不死身のフェニックスだぞ！　貴様なんぞに降参などするものか!!」

「そうか」

ライザーの苦し紛れの言葉を意に介さずジョシュアは淡々とライザーを倒す準備をする。

「ならば――耐えてみろよ」

ジョシュアは魔力で出来た紅く光る球体を十八個生成する。その球体の周りには魔力で出来た輪も浮かんでいて、その見た目を一言でいうなら紅い土星だった。

紅い土星は高速で動き、ライザーを包囲した。

「穿ち、切り刻み、押しつぶす。俺が使う魔法の効果はそれだけだ」

紅蓮の炎の様な魔力を纏いジョシュアはライザーを見る。その目に感情は無く、既にライザーの事など眼中に無いと語っているように

見える。
　それに気づいたライザーは怒り、立ち上がろうとするが何故か力が入らない。よく見ればライザーの脚は震えていた。どれだけ怒りで心を誤魔化そうとしても体は既に敗北を認めているのだ。
「……魔法を使うまでもないようだな」
「ちぃっ！」
　舌打ちをして弱気を隠そうとするライザーだが体が震えているその姿はどう見ても怯えている様にしか見えない。
「本当ならもっと手加減してやるべきなんだろうが――」
　ジョシュアの魔力が膨れ上がるのをライザーは間近で感じていた。まだ余力が、いや最初から本気など出していなかったのだと理解してしまった。
「いい加減『滅びの力』が使えないだけで弱者扱いは飽き飽きなんでな。俺を格下に見ていた奴等に実力を思い知らせる必要もある。悪いが踏み台になってもらうぞ」
　そこから先の記憶はライザーの脳内に残っていない。だが心には刻まれたのか、紅い色がトラウマになりグレモリー家の話題が出ると「紅色怖い紅色怖い紅色怖い」と叫び引き籠るようになった。

「ジョッシュお兄様、さすがにあれはやりすぎじゃ……」
「フェニックスを倒すならやりすぎなぐらいで良いんだよ」
「まあ、お兄様には良い薬です」
　紅色恐怖症を発症したライザーと戦ったジョシュア、愛称ジョッシュはグレモリー家の屋敷の一室にて妹のリアスとライザーの妹のレイヴェルと会話していた。
「グレモリー家の次期当主に当たるジョッシュ様を見下すだけでも失礼千万ですのに『リアスと結婚してグレモリー家を継ぐのは俺だ』などと世迷言を言い放ったのですから。むしろもっとやっても宜し

かったのですよ?」
「予定とは言え義理の弟をそこまで痛めつけるのは気が引けるよ」
あれで? リアスは実の兄の基準が分からなくなった。
ちなみにジョッシュの言った『義理の弟』とはライザーのことだ。どういう事かと言うと、まずジョッシュはサーゼクスの弟でありリアスの兄だ(ついでに転生者でもある)。ここで問題となるのはサーゼクスが魔王になったためにグレモリー家を継げない事だ。では誰が継ぐか。原作通りであればリアスの婿養子か将来的にはサーゼクスの息子のミリキャスになる。だがこの世界にはグレモリー家次男であるジョッシュがいる。長男であるサーゼクスが継がないなら一番継承権が高いのは次男のジョッシュだ。
結果、グレモリー家の将来を案じた父ジオティクス・グレモリーは原作ではリアスの婿養子にライザーを婚約者にしたが、この世界では次男のジョッシュとフェニックスの末娘レイヴェルとの婚約に変えたのだ。原作の様にライザーを婿養子にする案も有ったが、ライザーの素行や能力を鑑みてジョッシュが継ぐべきだと考え破棄した。
その事を知ったライザーがジョッシュに決闘を申し込んだ事で冒頭の事態へと繋がる事となる。
「でもレイヴェルは良いの? ジョッシュお兄様との婚約は勝手に決められたことでしょ?」
「確かにそうですが、私はジョッシュ様をお慕いしているので問題ありませんわ」
(……なんでこんなに好かれてるのだろうか?)
ジョッシュは疑問に思っているが好感度が高いのはちゃんと理由が有る。まずジョッシュの冥界での評価は一言で言うなら「サーゼクスにも意見を言える有能な悪魔」だ。転生者でありグレモリー家の後継ぎとして生まれたジョッシュは今後の事を考えて神話や政治関係の勉強を現在進行形で行っている。その過程で魔王になったサーゼクスに注意や忠告をしてきた。
代表例で言うなら塔城小猫の姉の黒歌の件だ。ジョッシュの考えでは黒歌がはぐれ悪魔と認定されたのは上級悪魔側の意見しか聞け

なかったからだと思っている。詳細は分からないから断言できないが、黒歌が主殺しを行った時に現場からすぐに逃げたのではないかと予測したのだ。ジョッシュは転生してから色々調べてみたが、『悪魔の駒』関係の法整備が「杜撰」の一言しか出ないほど穴だらけだった。そもそも転生悪魔の地位が低いために上級悪魔の言い分が優先されて、転生悪魔側が訴えても負けると断言できてしまうほど酷い状態だった。前世の頃から薄々察していたジョッシュが「権力に縋る老害共が！」と声を大にして愚痴を吐きたくなるほど荒ぶったのだから相当だろう。

『悪魔の駒』自体も問題が多く、相手の承諾を得なくても使える上に他神話の存在ですら転生できるのだ。その事を知ったジョッシュは「これは使う前に他の神話と交渉しないと戦争不可避だな……」と死んだ魚の様な目で悟りを開きかけた。外交担当で有るはずのセラフォルーですら気づいて無い為よりやばい。このままではまずいとジョッシュはセラフォルーとアジュカとサーゼクスを脅……説得して他神話と交渉し、使う上での条件を纏めた。

具体的には

1．双方の合意無しで使用できない様にセキュリティを搭載すること。

2．他神話に所属する（管理している）相手を眷属にする場合はその神話の関係者を立ち会わせること。

3．生死が関わっている時は緊急時のため許可する。ただし、後に厳しく調査を行う。

4．死んだ相手に使う場合は死後の世界を司る神と交渉してから行うこと。

この条約に反対する上級悪魔もいたが「他神話と戦争を起こしたいんですね？　そうなった時には最前線で戦ってくれますか？」と言うと沈黙したそうな。

余談だがこの一件で他神話からの連絡がジョッシュに来るようになった。外交担当のセラフォルー涙目である。

閑話休題。

転生悪魔の扱いが悪すぎた為に黒歌は自首せずに逃げたのではと考えたジョッシュは、上級悪魔とその眷属のトラブルを処理する部署を設立するようサーゼクスに打診し、更に過去視の能力を持つ悪魔を派遣して転生悪魔が無条件ではぐれ扱いされない様にした。

結果、黒歌は逃げずに自首し、過剰防衛のための期限付き奉仕活動に従事する事で決着した。

……ここまで冥界に大きな影響を与えた悪魔。その上レイヴェルが婚約者だと分かってから定期的にデートを重ね、プレゼントを贈り、迷惑にならない程度に連絡を取るようにしていたのだから好感度が上がらないわけがない。本人は「原作ヒロインに嫌われたくないと思って頑張っただけなのに……ここまで好感度上がるもんなのか？」と述べている。

「ところでリアス、勉強は進んでいるんだろうな？」

「当然です！　来年からは日本で領地管理を行うのですから万全を期しています！」

「ならいい。決して気を抜くんじゃないぞ。駒王町は元々日本神話が管理していたのを宗教争いで教会が勝ち取った土地だ。朱乃ちゃんの一件で神社の管理者は離れ、冥界側が起こした事件で教会の勢力も離れた。また悪魔が管理する事にはなったが無条件じゃない。問題を起こせば元々管理していた神が文字通り飛んできて、そこから戦争になりかねない。相手からすれば領土を奪った敵だからな」

「わかっています」

ジョッシュはリアスには出来るだけ厳しく対応している。原作での管理の仕方を知っているからだ。依頼されてからはぐれ悪魔を討伐している様ではどれだけの死人が出るか分かったものではない。それに自分がどれだけ関われるか分からないため、今の内にリアスを立派な管理者に育てようと決めたのだ。妹に甘々のサーゼクスでは、合格ラインのハードルも低いから無能になってしまったのだと思ったのもある。

「判断が付かない時はソーナちゃんにも相談しろよ。自分のプライドを優先した結果の被害ほど最悪なものは無いからな」

「はい」
「本当にどうしようもない時は俺か兄さんに連絡しろよ？　力不足なのに無理に解決しようとする方が迷惑になるからな」
「もう何度も聞いたから分かっています」
「それだけ気を付けないといけないってことだ」
　リアスからすると耳に胼胝ができるほど聞いた内容の繰り返し。さすがに若干ウンザリした表情をしているが、大事な事だと分かっているのか真剣に聞いている。
　このような形でジョッシュによるリアスの魔改造は進められている。この結果が予想外の事態へと発展した事を知るのは、リアスが駒王学園の二年生になってからだった。
「ジョッシュお兄様。実は先生に相談されて、一年生にいる問題児三人をどうにかしてくれって言われてるの。私の判断で決めるよりグレモリー家の方で決めるべきだと思って……」
「普通に退学じゃ駄目なのか？」
「まだ共学になったばかりで男子の数も少ないから、悪いイメージを付けたくないって」
「あー、男子の肩身が狭くなると」
「それに元女子高だから、男子の印象が悪くなると共学から元に戻そうって意見が出るかもしれないし……」
「うーん。なら別の学校に転入させたらどうだ？　厳しいと評判のところにすれば、問題起こして退学になっても駒王学園のダメージも少なくて済むだろ？」
「そうね……わかったわ。早速先生達に相談してみるわ」
「頑張れよ」
「はい！」
（問題児か。そう言えば原作主人公も問題児だったな……。まあ、まだリアスも二年生だし関係ないか）
　ジョシュア・グレモリー。齢数十歳。
　原作知識がうろ覚えだった為に原作主人公を退場させてしまう痛恨のミスを犯すのだった。

# 曹操に転生したら英雄派が別物になった

生まれ変わったら曹操だった。

彼がその事に気づいたのは何処からともなく彼の手に現れた槍が『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』であったのと、闘戦勝仏に会った時に「お前の先祖は三国志の曹孟徳だ」と言われた事で漸くこの世界が前世の時に読んだ『ハイスクールD×D』の世界だと知った。

彼は思わず叫びそうになったのを必死で堪えた。彼の記憶では『ハイスクールD×D』の曹操と言えば主人公の兵藤一誠にやられる敵キャラ。

英雄（人外を殺す）になるためなら何しても良いとか思っているヤバい奴。兵藤一誠がパワーアップするための踏み台。その所為で神器にすら見放された奴。と言うのが彼の中の曹操のイメージだ。

彼は誰もいないところで叫んだ。

「冗談じゃない！　俺は平凡な仕事に就いて仕事から帰ったらラノベに漫画やアニメやゲームを楽しんで、休日には女性との出会いを求める程度の普通の人生で十分なんだよ！　何が悲しくて生まれ変わったら他人の踏み台になる人生を送らなきゃいけないんだ！　ふざけるな！」

とはいえ、彼の中には既に神器が宿っているからそんな些細（？）な望みすら叶いそうにない。

彼は決心した。どんなことをしてでも原作に関わらずに平穏な生活が送れるようにしてやる!!　と。

「……と頑張ったのは良いんだけどなぁ」

どうしてこうなった。曹操は頭を抱えていた。平穏な生活を求めて努力した彼の現在の生活は原作とは違うものになっていたが――

「曹操！　ジークとヘラクレスがまた喧嘩してるぞ！」

「曹操！　レオナルドにまた余計なことを教えたわねぇ！」

「曹操さん！　いい加減休んでください！　目の下にクマができていますよ！」

ゲオルク、ジャンヌ、アーシアの順に曹操の仕事部屋に突撃してくる面々に思わず死んだ魚の様な目を向けている曹操。今の彼の状況を一言で言うなら「ブラック」の一言であろう。
「あージークとヘラクレスに関してはすぐにどうにかするから被害が出ない様にだけしてくれ。ジャンヌ、レオナルドは具体的に何をしたんだ？　アーシア、俺は今休むわけには行かないんだ。これが終わったら休むから」
順番に対応していく曹操だが、その声は力なく疲れ切っている。毎日のようにトラブルの対応に追われていれば仕方ないだろう。自分が原因の時も有るなら尚更だ。
「わ、わかった。できるだけ早く対応してくれ」
「レオナルドが三大勢力に喧嘩売ってる名前のモンスターを創ったのよ！　ベルゼブモンとかセラフィモンって何!?」
「ダメです！　今すぐベッドに横になってください！　体が持ちません！」
ジャンヌの話を聞き「ああ、そう言えば前世の時に好きだったデジモンの話をしたな」と思い出し、アーシアの言葉を聞き「自分はそんなに疲れている様に見えるだろうか？　睡眠は充分取っているのだが」と疑問に感じながらも手は机の上に有る書類を処理し続けている。
「すまない、ジャンヌ。次から気を付ける。レオナルドには『進化前の姿にしろ』と言っておいてくれ。アーシア、まだ仕事が残っているんだ。まだ。オレは、ヤスメナイ」
対応していく内に段々と口調がおかしくなっていく曹操の様子を見てアーシアは机の上の書類を奪い取る。
「私が処理しときますから休んでください！」
「いや、しかし――」
「や・す・ん・で・く・だ・さ・い！」
「あっはい」
有無を言わせぬアーシアの迫力に曹操は頷くしかなかった。
「ジャンヌさんも子供達を寝かしつけたら手伝ってください！」

「分かってるわよ。それまではお願いね」
「はい！」
問答無用とばかりにジャンヌに仕事部屋から連れ出される曹操だった。

「はぁ～疲れた」
いざ仕事を止めると一気に疲れを認識してしまい体が重く感じる曹操はジークとヘラクレスを止めるために移動を開始した。
「なんでこうなったのやら」
今の英雄派という組織は原作から完全にかけ離れたものとなっている。
曹操達は現在人里離れた山中に建てた施設で暮らしている。ここで曹操達は世界中から集めた孤児の世話を行っている。孤児達は主に神器所有者か英雄の魂を受け継いでいるかであり、それが理由で捨てられたり神話勢力（主に三大勢力）に狙われたりして家族を失った子供達を保護している。もちろんそれ以外の孤児も保護している。更に神器が原因で疎まれていた人達も保護、と言うよりスカウトして働いてもらったり、あるいは三大勢力を除いた神話関係の職を斡旋したりもしている。アーシアも教会から追い出された所をジャンヌが保護した。
ジャンヌ曰く「聖女の魂を受け継いだ身としては気にかけずにはいられなかっただけよ」とのこと。実はジャンヌ・ダルクの逸話的に聖女の扱いが気になって仕方が無かったらしく、情報を集めていたらアーシアの件が発覚してすぐに保護したようだ。
閑話休題。
こんな組織が『禍の団』所属の訳もなく、曹操達は英雄派ではなく別の組織名を名乗っている。その名は『ＳＰＩＲＩＴＳ』。名前の由来は曹操が前世の頃大好きだった漫画から来ている。ちなみに他のメンバーには名付けた理由として「英雄には程遠い俺達だが魂だけは立派でありたい――と言う意味を込めた」と述べている。
当然ながら『ＳＰＩＲＩＴＳ』がここまでの事業を行うのに曹操達

の様な若人だけでは成立しない。ある神話勢力の保護下にいるため活動できている。一つはエインヘリヤル候補が欲しい北欧神話。もう一つが、と言うより一柱が――

「あ、曹操くん。お邪魔しているよ」

「こんにちは、ヘスティア様。」

炉の神であり家族を失った孤児たちの保護者とされる女神ヘスティアが後ろ盾となっている。彼女は元々神器関係で生まれる孤児達に胸を痛めていて、秘密裏に保護したりもしていたが神の身では色々と不都合も多く難儀していたところを『ＳＰＩＲＩＴＳ』と出会い共に協力する形で孤児の保護を行っている。実際、曹操達もヘスティアの協力がなければ子供達の世話は難しかったと言える。なぜならまともな家庭環境だった者は一人もいないのだから親代わりになるのが難しく、苦労していた。転生者であるため唯一まともな家族と言うものを知っている曹操でも子育ての経験は無く、ヘスティアが全員の親代わりをしてくれなければ持たなかっただろう。今となっては誰もヘスティア相手には頭が上がらないぐらい全員が母親の様に思っている。

「また限界まで仕事していたのかい？」

「う……はい」

「駄目じゃないか。君はここのリーダーなんだから無理をしたら皆に迷惑がかかるって事を自覚しなきゃ」

「はい、すいません」

働きすぎの曹操を叱るその姿は正しく母親。曹操も目の前の女神相手では言い訳もできずに謝る事しかできない。自分を心配して叱っているのだから猶更だ。

「アーシアちゃんにも休む様に言われているだろ？　周りの皆も心配してるってことだよ？」

「今後は気を付けます」

「それは前にも聞いた」

このままでは分が悪いと感じた曹操は話を切り上げることにした。

「すいません、ヘスティア様。俺はジークとヘラクレスの喧嘩を止め

なければ行けないので……」
「またあの二人かい？　いい加減年長者として子供の見本となって欲しいんだけどなぁ」
「君も含めてね」とヘスティアにジト目で見られた曹操は即座にその場を離れるのだった。

曹操が現場に着いた時には既にまだ二人は喧嘩していた。
「ジィィィークゥゥゥ!!」
「ヘラクレスゥゥゥ!!」
ジークの剣とヘラクレスの拳がぶつかり合い、いつも子供達を遊ばせている運動場がボロボロになっていた。後で修復能力を持つ者達が直してくれるとはいえ毎回どうにかならないのだろうかと曹操は頭を抱えた。このままでは駄目だと思った曹操は近くで二人を見守っているゲオルクに話しかける。
「ゲオルク、今回の喧嘩の原因は何だ？」
「曹操。それなんだが――」
時を少し遡り、二人が喧嘩する直前の会話。
「ジィィィーク！」
「なんだ、ヘラクレス？」
「お前の所為で恥掻いたじゃねえか！」
「何のことだ？」
「お前、俺が極寒をゴッサムと読んだのを訂正しなかっただろうが！
お陰でガキ共の前で間違ったまま読んじまっただろ！」
「ふっ、間違った貴様が悪い」
「鼻で笑うんじゃねえぇぇぇ！」
以上。
「――と言った感じでヘラクレスが切れて殴り掛かったんだ」
「……」
曹操は内心思った。「なんでリトルバスターズみたいな喧嘩してるんだよ！」と天を仰いだ。「ヘラクレスが井ノ原真人でジークが宮沢謙吾ってことか!?　あれ意外と違和感ないぞ？」などとどうでもいい

ことを考えて現実逃避し始める。
「曹操。悪いが止めてくれないか？　あの二人は曹操かヘスティア様の言う事以外聞いてくれないからな」
「……もう、ヘスティア様に頼んだらどうだ？」
「さすがにこんな下らない事に付き合せられないだろ？」
「ごもっとも」
　観念した曹操は喧嘩を止めるために二人に近づく。自身の神器『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』を手に持ち構える。
「禁手化（バランス・ブレイク）」
「「!?」」
　声を聞き漸く曹操が来ている事に気づいた二人はその場で硬直する。
「ま、待つんだ曹操。早まるな」
「お、俺達が悪かった。喧嘩はもう止めにするから」
　このままではマズいと悟った二人は必死に曹操に弁明する。
「……後でお前達にピッタリの喧嘩方法を教えてやる。次からその方式でやれ」
　曹操の言葉に見逃してくれると思った二人はホッと息を吐く。
「それはそれとして罰は受けてもらう」
　すぐに絶望へと叩き込まれたが。
「「ま、待って――」」
「第一の槍『エクスプロージョン』!!」
　そう言って曹操が槍を激しく突き立てると同時にジークとヘラクレスを爆発が飲み込んだ。
　その後、曹操がリトルバスターズの「野次馬から投げ込まれた物を武器として戦うバトル」を教え、ジークとヘラクレスがそれで戦う様子を見て施設内で子供達が真似するようになったため、曹操はまたジャンヌに叱られたそうな。

ヴァーリの姉らしいけど原作知らない

（確かに前世とは違う顔にして欲しいとは言ったけど）

彼女は自分の顔を鏡で見て驚愕していた。その顔は前世の頃に愛読していたラノベに出てくるキャラにそっくりだからだ。

（なんで……『境界線上のホライゾン』のホライゾンにそっくりなんだろ？）

名は体を表すと言うが今の彼女は正しくその通りだろう。

ホライゾン・ルシファー。

それが今世の、ヴァーリ・ルシファーの姉として生まれた彼女の名前だ。と言っても彼女が弟の存在を知るのは暫く後になる。なぜならリゼヴィムによって別々に暮らしていたのと、彼女が『ハイスクールD×D』を知らなかったのが原因だ。

それが理由で彼女はある行動に出る。

（家出しよう）

ヴァーリと同じ様に祖父と父親に虐待されているホライゾンに迷いは無かった。母の事は心配だが子供である自分では助ける事は出来ない。なら大人を頼るべきだと判断したからだ。

（そうと決まれば――）

彼女は外の景色が見える窓側の壁に手を向ける。転生前に神から貰った特典を使うために。

『Ｃｈａｒｇｅ！』

ホライゾンの右手に銃口の付いた青い筒が装備されて音声が鳴る。

（三回ぐらいで充分かな）

『Ｃｈａｒｇｅ！　Ｃｈａｒｇｅ！』

銃口から光が漏れ始める。それをホライゾンは左手で支える。

「……ファイア」

『Ｓｈｏｔ！』

銃口から巨大な魔力のエネルギーの塊が発射され壁を破壊した。

「……おお」

感心するような声を上げるホライゾン。彼女が転生特典として選

んだのは前世で遊んでいた『ロックマンの力』を使える神器だ。名づけるなら『機人の青砲（ロックバスター）』だろうか。
「……よし」
風穴の空いた壁を通り彼女は飛び去った。……上空に派手な花火を打ち上げてから。
その花火を見たジョッシュがリゼヴィムの屋敷に兵を伴って訪れたが、辿り着いた時には既に蛻の殻だった。
ちなみにホライゾンは道に迷ってしまい、そのまま行方不明となった。

数年後、ホライゾンは堕天使の陣営にいた。
「……アザゼル」
「なんだ、ホライゾン」
今、彼女は銃口をアザゼルに向けている。心なしかアザゼルの声も震えているように聞こえる。
「私は前から言っていたはずです」
「……何をだ」
「この期に及んで惚けますか」
『Ｃｈａｒｇｅ！』
ホライゾンの表情は変わっていないがよく見ると額に青筋が浮かんでいた。
「神器所有者から安全に神器を取り出せるようにしなさいと何度も具申したのに、あなたは研究に夢中でちっともそっちを進めやしない。いい加減私の堪忍袋も千切れると言うものですよ？」
ホライゾンの言葉には怒りが込められていた。なぜならホライゾンにとってこれは譲れない事だからだ。
『神の子を見張る者』に来てからホライゾンは自分以外の神器所有者と出会った。彼らは神器を持つために真っ当な生活を送れずにいたところを堕天使に保護された。だが、はっきり言って『神の子を見張る者』での生活もまともとは言い難い。主な原因は堕天使の思想が他種族を見下すこと、特に人間は利用する者と保護すべき者のどちら

かと言って良いほど極端だからだ。三大勢力は特にその傾向が強く問題が起きやすい。
『神の子を見張る者』内でも神器所有者と堕天使の関係は問題が多い。本来なら保護者に当たる堕天使の立場が上と言えるのだが、神器所有者からすれば全堕天使を同じ扱いするなどあり得ないことだろう。自分達の境遇に同情し保護してくれた堕天使、自分を神器のおまけ程度にしか見ていない堕天使。それが分かりやすく態度に出ていれば片方のみを敬うのは自然と言える。
そうなれば自身を敬わない神器所有者に対して、人間を常に見下している堕天使が真面な対応をする訳が無く、許可無く神器を取り出す者も出てくる。そして取り出した神器を自身のものにするか、幹部に献上して成り上がろうとする者が出てくるのだ。その度に制裁しているがアザゼルが研究に夢中でトップとしての役割を果たしていないため勘違いした堕天使が後を絶たないのだ。
ならば、せめて神器を抜かれても死なない様にしろ、とホライゾンは何度もアザゼルに忠告した。アザゼルの言い分として「命懸けの実験になるからおいそれとはできない」と言っている。それでも出来ることはあるはずだと何度も何度も言ったのだが一向に進歩が見えないために遂にキレてしまったのだ。
「い、いやそっちの研究もちゃんと進めているぞ!?」
「ほう……」
アザゼルの言葉を聞きホライゾンは目を細める。
「ちなみにどれぐらい進んでいます?」
「え、え~と、に、二十パーセントぐらい?」
「本当ですか?」
「も、勿論だ」
「……」
アザゼルを無言で見つめるホライゾンの目には信頼のしの文字すら見当たらない。いかにアザゼルの普段の行いが悪かったのか物語っているようだ。アザゼルの目が明後日の方向を向いているのもあるが。

『Ｃｈａｒｇｅ！』
「本当ですか？」
　再度同じ質問をするホライゾンの目は言っている。「私の目を見てもう一度同じことを言ってみろ」と。同時にエネルギーチャージで「黙っているなら撃つ」と態度に出している。
「……」
「……」
『Ｃｈａｒｇｅ！』
「む、無言でチャージするのは止めてくれ！」
「ならば私の質問に答えてください」
　その答え如何では撃つ。アザゼルの末路は既に決まっていた。
「……お」
「お？」
「多目に見て三パーセントです……」
「ギルティ」
『Ｃｈａｒｇｅ！　Ｃｈａｒｇｅ！　Ｃｈａｒｇｅ！　Ｃｈａｒｇｅ！　Ｃｈａｒｇｅ！』
「ちょっま――」
「生まれ変わってやり直せ、駄目堕天使」
『Ｆｉｎａｌ　Ｓｍａｓｈｅｓ！』
　アザゼルの視界は青白い閃光で塗りつぶされた。同時に『神の子を見張る者』の施設から極太の青白いビームが天に向かって発射されるのを多数の者が見たという。
「姉さん……遂に切れたか」
　その光景を見たヴァーリ・ルシファーは後にこう語る。
「いつかやると思っていた」
　その後、『神の子を見張る者』の神器所有者を『ＳＰＲＩＴＳ』に保護される様に（ヴァーリ協力のもと）誘導したホライゾンは再び行方知れずとなった。